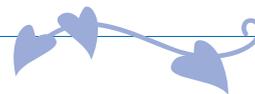


第2章 これまでの人口推移



本計画を定めるにあたって、本市のこれまでの人口推移を明治期からの「まち」の歴史とともにふりかえると次のとおりです。

1 人口停滞期（明治～昭和15年頃）

明治35年から昭和15年頃までの福生の人口は、ほぼ横ばいが微増程度で推移していました。この頃までの福生は、養蚕の盛んな純農村地帯を形成しており、人口増加の要因は、そのほとんどが出生と死亡の差である自然増によるものでした。

2 人口増加期（昭和15年～35年頃）

昭和14年に旧福生村、熊川村の一部を含む武蔵野の山林一帯200haが国に接收され、翌年旧大日本帝国陸軍立川飛行場の拡張飛行場として「多摩陸軍飛行場」が建設されました。これに伴い、その附属施設として航空審査部、航空整備学校などが設置されました。同年両村の合併により誕生した福生町は、これを契機に人口も増えはじめ、一躍軍都として発展するようになります。

戦後は陸軍の施設が米軍に接收され、横田基地となり、福生町は、基地を中心として更に発展を遂げることとなりました。また、基地労働者やサービス業等が激増し、米軍ハウスが約2,000戸も建てられる中で、昭和20年頃から人口の増加傾向に拍車がかかることとなりました。

3 人口急増期（昭和35年～50年頃）

昭和14年以降、立川都市計画区域の一部であった福生地区は、昭和32年羽村、瑞穂地区とともに、新たに福生都市計画区域に編入され、更に昭和37年首都圏整備法による都市開発区域の指定を受けると、都心のベッドタウンとして急速に宅地化が進みました。

昭和39年には熊川住宅、昭和42年には加美平住宅の入居が開始され、町制施行時に7,000人台であった人口は、昭和40年代に入ると30,000人を超え、昭和45年には市制が施行されました。その後市街化は更に進み、昭和49年には福生団地の入居が開始されるなど、高度成長期の昭和35年頃から50年頃までの15年間に人口は急増しました。

4 安定成長期（昭和50年～平成7年頃）

戦後増加し続けていた地方圏から三大都市圏への転入超過が初めて転出超過に転じた昭和50年頃と時を同じくし、本市においても次第に人口増加は、緩やかになっていきました。

昭和50年代に入ると、転出が転入を上回る社会減の現象が生じましたが、自然増がこれを上回り、全体では増加傾向を示しながら昭和58年には人口が50,000人となり、平成3年には60,000人に達しました。その後は平成7年に至るまで社会減の状態が続き、少子化の現象と相まって人口推移は、微増傾向の状態が続きました。

5 人口再停滞期（平成7年～）

日本全体で少子化の影響が顕著に現われ始めたのと同じ時期に、福生市においても同様の傾向が現われ、その結果、国勢調査人口では、平成7年の調査以降、減少傾向となりました。

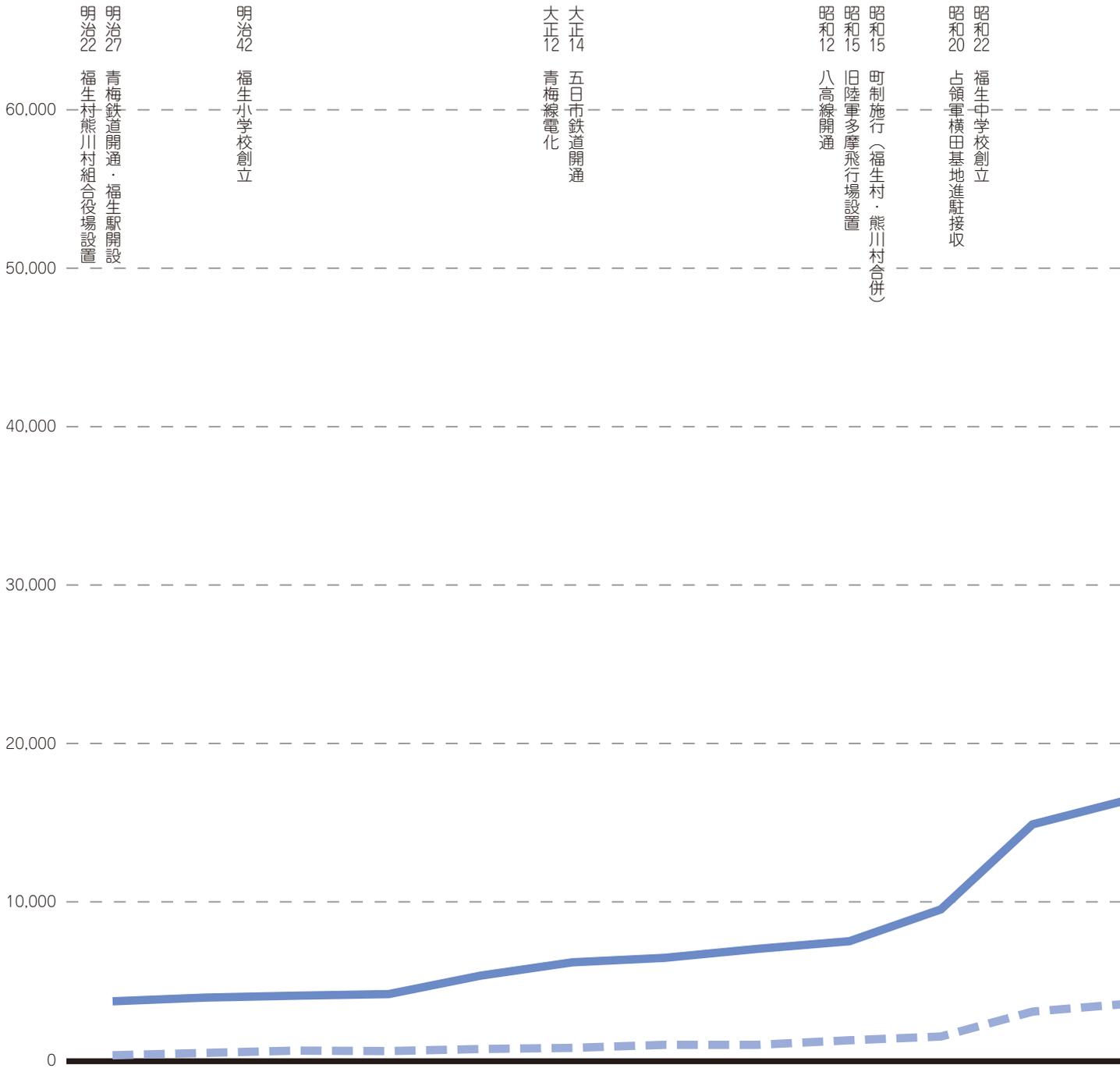
また、平成2年には、65歳以上の老年人口が人口の7.9%でしたが、平成12年には13.3%、平成17年には16.9%と急激に高齢化が進んでいます。



<人口・世帯数の推移>

人口停滞期

人口増加期

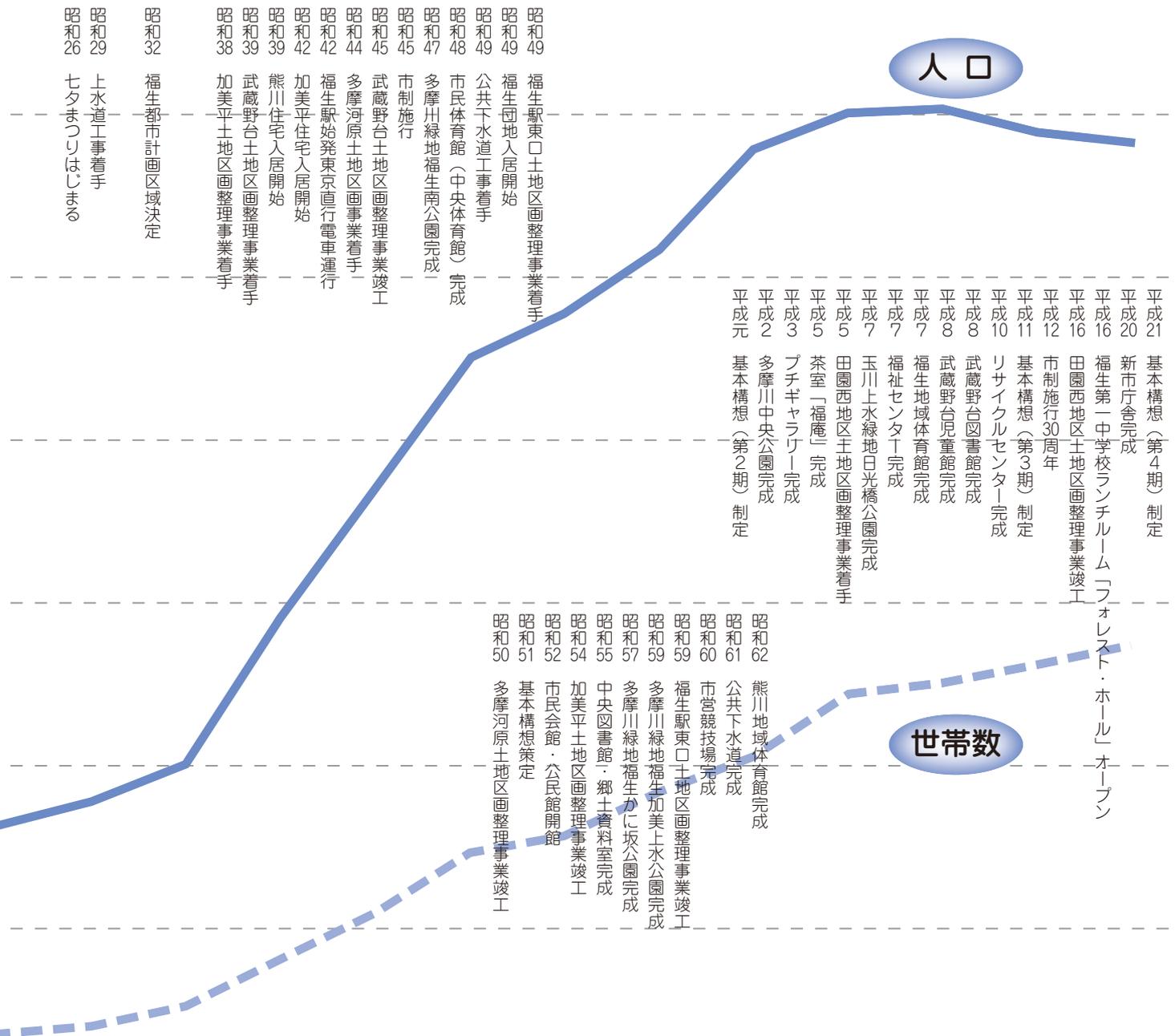


	明治35年 (1902年)	明治40年 (1907年)	大正元年 (1912年)	大正4年 (1915年)	大正9年 (1920年)	大正14年 (1925年)	昭和5年 (1930年)	昭和10年 (1935年)	昭和15年 (1940年)	昭和20年 (1945年)	昭和25年 (1950年)
人口(人)	3,111	3,559	3,763	3,766	5,031	5,907	6,005	6,370	7,921	9,918	14,669
世帯数(世帯)	493	567	612	671	833	978	1,024	1,079	1,280	1,481	3,210

人口急増期

安定成長期

人口再停滞期



昭和30年 (1955年)	昭和35年 (1960年)	昭和40年 (1965年)	昭和45年 (1970年)	昭和50年 (1975年)	昭和55年 (1980年)	昭和60年 (1985年)	平成2年 (1990年)	平成7年 (1995年)	平成12年 (2000年)	平成17年 (2005年)	平成22年 (2010年)
18,173	20,657	29,133	37,943	45,418	48,793	51,457	57,141	60,207	60,288	59,473	58,122
4,174	5,142	8,177	11,326	15,034	16,649	18,453	21,534	24,095	25,566	26,877	27,765

(住民基本台帳各年1月1日現在)